

デイヴィドソンによる反懐疑論的論証の検討

木下 頌子¹

0. はじめに

外界の知識についての哲学的懐疑論は、われわれが世界のあり方について信じていることが実は大規模に誤っているかもしれないという疑念から出発する。たとえば、H.パトナムによって描かれる水槽脳仮説や、デカルトによる悪霊仮説が描く状況はまさにわれわれが大規模な誤りに陥っているような状況である。懐疑論者は、そうした状況が現実のものでないことをわれわれは決して知ることができないと主張する。そしてそのことから、われわれは知識をもつことが不可能であると懐疑論者は結論するのである。

D.デイヴィドソンは、信念や意味、真理といった意味論的概念の相互的な結びつきについての理論構築を自身の重要な哲学的課題の一つとした哲学者である。デイヴィドソンは、そうした探求の中で、信念や意味の本性に関する自身の考察から「われわれの信念が総じて偽であることは不可能である」²「われわれの信念は本性上真である」³ことが導かれると論じる。これは懐疑論的な状況の可能性そのものを否定してしまう主張である。デイヴィドソンは、多数の著作⁴においてこうした反懐疑論的主張を導く論証を行っているが、それらは二種類の論証に分類することができる。すなわち、初期の著作で提示され、とりわけ有名な「全知の解釈者論証」および、より後年の著作で論じられる「三角測量からの論証」である。前者は、まったく未知の言語の話者の発話の意味と信念の内容を解釈者がどのようにして特定しうるかを説明する根源的解釈のモデルの中で登場する。後者は、そもそも信念や発話の内容がどのようにして与えられるのかを説明する三角測量のモデルに基づいて展開される論証である。本稿の目的は、デイヴィドソンのこれらの論証を検討し、少なくとも後者の論証について一定の擁護を与えることである。

これら二つの論証に対して、B. ストラウドは、デイヴィドソンはどちらにおいても自身の議論の射程を見誤っており、反懐疑論的帰結は導かれないと批判している。しかし、私は全知の解釈者論証についてはストラウドの指摘は一定の正しさをもつものの、三角測量に基づく論証についてはストラウドの批判は当たらないと考える。私は、ストラウドの批判は三角測量の性格を正しく理解していないことに基づくことを指摘し、デイヴィドソンの三角測量モデルを認める限りにおいて、反懐疑論的帰結が導かれることを主張したい。本稿の構成を簡単に述べておこう。第1節では、全知の解釈者論証がどのような論証であるのかを説明し、それに対するストラウドの批判をとりあげる。そして、ストラウドが指摘するように、この論証にはまだ答えられるべき課題があることを見る。第2節では、三角測量に基づく論証、および、それに対するストラウドの批判を紹介し、ストラウドに対して応答することを試みる。第3節で、まとめと今後の展望を述べる。

1. 全知の解釈者論証

1.1 根源的解釈と寛容の原則

第1節では、われわれの信念が大部分偽であることは不可能であるという主張を導くために、デイヴィドソンが初期の著作において提示した「全知の解釈者論証」を検討する。この論証は、デイヴィドソンが、われわれが他の人の発話や信念の内容を理解する際に必ず働いている原則として指摘した「寛容の原則 (Principle of Charity)」を重要な前提とする。そこでまず本節では、この寛容の原則の内容を確認しよう。

デイヴィドソンは、他人の発話の意味を理解する際に何が必要であるかを探究するために、クワインに倣って根源的解釈の場面の想定を出発点とする。根源的解釈とは、まったく未知の言語に対してその意味の理論を構成していくプロセスである。こうした場面で解釈者は、その言語の話し手がおかれた環境と、話し手がどのような文に対して真とみなす態度をとっているかということを手がかりに、話し手の発話を解釈する。このとき重要なのは、我々が未知の言語の話し手の発話の意味を特定することと、その話し手が何を正しいと信じてい

るかを特定することが切り離せないという事実である。例えば雪が降っているときに、未知の言語の話し手が「フルンゼグチ」という文を真とみなす態度をとっているとしよう。このとき解釈者はこの話し手がその状況について自分と同じ正しい信念をもっている（つまり、自分と同様に雪が降っていると信じている）と考えない限り、「フルンゼグチ」を雪が降っていることを意味すると解釈することはできない。この状況において、もし解釈者が話し手に誤った信念（晴れているという信念等々）を自由に帰属して良いならば、話し手の発話が何を意味するのかどのようにでも解釈可能になり、特定することはできなくなってしまう。そこで、話し手に帰属させられるべき信念内容の可能性に制限を加えることで、話者の言語の意味の特定を助けるのが、次の寛容の原則ある。

(PC)解釈に成功するためには、解釈者は、話し手の信念が大部分真であるとみなさねばならない⁵。

つまり、解釈者は、話し手の発話を解釈するために、自分が正しいと信じていることの大部分を、その話し手も同様に信じていると仮定しなければならないのである。

以上が寛容の原則の説明である。さて、デイヴィドソンは、この寛容の原則(PC)が反懐疑論的帰結をもつと主張する。

さて目下の最大の要点は、他人の言葉を解釈する際のわれわれの基本的な方法論にしたがえば、話し手が真とする最も単純な文はほとんどいつも真であるということが必然的に成り立つ、ということである⁶。

ここで言われている「基本的な方法論」とは、もちろん(PC)のことである。だが、なぜ(PC)を認めると、われわれの大部分の信念が必然的に真であることが示されるのか。それを示すのが、一般に「全知の解釈者論証」とよばれる論証である。次節でこの論証とそれに対するストラウドの批判を見よう。

1.2 全知の解釈者論証とストラウドの批判

全知の解釈者論証は、デイヴィドソンの論文「形而上学における真理の方法」⁷ および「真理と知識の斉合説」⁸ において登場する論証である。まずデイヴィドソンは、全知的な解釈者という仮想的存在者を想定する。この存在者は、この世界の物理的な状況についてすべて客観的に正しいことを信じているとされる。ただし、人の心的状態については知識をもっておらず、それらを知るためには我々と同様に解釈を行う必要がある。さて、この全知の解釈者がわれわれの発話を理解するために解釈を行う場面を考えてみよう。デイヴィドソンは、このとき、以下のようなことが言えると論じる。

全知の解釈者は、様々な信念を他者に帰属させ、われわれ残りの者が行うのと同様に、他者の発話を自分自身の信念に基づいて解釈するのである。彼はそれをわれわれ残りの者と同様にを行うのであるから、必然的に、自分が行う信念帰属と解釈を理解するのに必要なだけ多くの一致を、彼は発見するのである。そしてこの場合、もちろん一致している事柄は仮定により真である。だが、いまや、世界についての大規模な誤りは端的に理解不可能である。なぜなら、それが理解可能であると考えすることは、誰かを大規模に誤っていると正しく解釈する解釈者(全知の解釈者)が存在しうると考えることであるが、我々はそれが不可能だといままさに示したからである⁹。

ここでのデイヴィドソンの議論を理解する一つの自然な方法は、デイヴィドソンが全知の解釈者をわれわれの信念の真理保証者として用いていると理解することである。全知の解釈者が先の(PC)に従って我々の発話を解釈するとき、全知の解釈者はわれわれの信念を大部分真とみなして解釈する。全知の解釈者の信念は仮定上すべて真なのだから、全知の解釈者に真とみなされた大部分の我々の信念は実際に真であるというわけだ。

だが、ストラウドは、このように理解された全知の解釈者論証に対して次のような批判を行う。この論証において、全知の解釈者は単に想定可能なものとして導入されているだけである。しかし、全知の解釈者が現実に存在すると主

張できない以上、せいぜい示されるのは、「もし全知の解釈者が存在するならば、その解釈者によって解釈された我々の信念は大部分真である」という条件文のみである。したがって、全知の解釈者が存在することを示さない限り、我々の信念が真であるという結論は導かれぬ。そして、ここで全知の解釈者が存在すると何の理由もなく主張することは、私たち解釈者が解釈している信念が(全知の解釈者が解釈した信念と同様に)客観的に真であると根拠なく仮定することに等しい。だがそれは、われわれの信念が大部分真であることを示す議論として見るならば、明らかに論点先取である¹⁰。

しかし、「全知の解釈者論証」はこうした論点先取に陥らない仕方でも理解することも可能である。別の理解の仕方では、この論証は全知の解釈者の存在に依存しないような論証として捉えることができる。先の記述の後半部分に注目しよう。

だが、いまや、世界についての大規模な誤りは端的に理解不可能である。なぜなら、それが理解可能であると考え、誰かを大規模に誤っていると正しく解釈する解釈者(全知の解釈者)が存在しうると考えることであるが、我々はそれが不可能だといままさに示したからである。(傍点引用者)

ここでの記述は、「たとえ全知の解釈者という存在者を想定したとしても、誰かが大規模に誤っていると解釈されることは不可能である」ということを示す議論として解釈することができる。その議論を少し丁寧に述べるならば、次のようになる。まず、(PC)によって、普通の解釈者であれ全知の解釈者であれ、解釈を成功させる限りは相手の信念を大部分真とみなさなければならない。したがって、いかなる場合においても大規模に誤った信念を帰属させられる人は存在しえない。それゆえ、我々の信念が大部分偽であることは不可能であり、我々の信念は必然的に大部分真なのだ。これはたしかに、先ほどのように全知の解釈者の存在を仮定しない点で、論点先取であるという非難は免れている。

しかし、ストラウドはこのように理解された議論についても、われわれの信念が大部分真であるという結論は導かれぬと指摘する。ストラウドによれば、

この議論が示すのはたかだか、全知の解釈者であれ誰であれ、われわれの信念を大部分偽であると解釈することは不可能であるということにすぎない。だが、誰かがわれわれの信念を大部分偽だと解釈することはありえないとしても、われわれの信念が大部分偽であることは可能であるだろう。ストラウドはこのように論じて、デイヴィドソンが、寛容の原則(PC)から反懷疑論的帰結が得られると考えているのは誤りだと主張している。

このストラウドの批判は、上の引用の傍点部分の主張を疑問視するものである。それは簡単に書くならば、次のような主張である。

(#)われわれの信念が大部分偽であることが可能である

⇔ 誰かがわれわれの信念を大部分偽だと解釈することが可能である

この主張は、信念が偽でありうることと、信念が偽だと解釈されうることを同一視する主張である。つまり、誰かに偽だと解釈される可能性がないのに本当は偽であるかもしれない信念というものはないのだ。デイヴィドソンは、全知の解釈者論証においてこの主張を自明な前提として用いているように思われる。しかし、この主張は、ストラウドが疑問を呈するように、議論の余地のあるものである。したがって、第二の理解の仕方に従うとしても、(#)に説得的な説明が与えられないかぎり、全知の解釈者論証に対するストラウドの懸念はもったもなものである。したがって、全知の解釈者論証には、埋められるべき細部が残されている¹¹。

1.3 まとめ

全知の解釈者論証は二通りの仕方理解されることができ、ストラウドはどちらの理解のもとでも、デイヴィドソンはわれわれの信念が大部分真であることを示せていないと主張した。したがって、少なくとも現段階では、全知の解釈者論証が成功していると結論することはできない。

とはいえ、後年になるにつれて、デイヴィドソンは信念や意味の本性を考えるに当たり、根源的解釈に代わって三角測量のモデルを用いるようになった。このモデルは、解釈者を前提せず、そもそも信念の内容や発話の意味がどのよ

うにして与えられるのかを説明する。そして、デイヴィドソンはこのモデルにおいて内容や意味が与えられる仕方を見ることで、懐疑論が排除されることを主張するのである。私はこの三角測量による論証の方が反懐疑論的帰結を導く論証としてより洗練されていると考える。したがって、次節ではこの論証を検討したい。ストラウドはこの論証についても、デイヴィドソンは自身の議論の射程を見誤っているという診断を下している。しかし、私はストラウドの批判は三角測量の内実を理解しそこなっていると考える。

2. 三角測量からの論証

2.1 三角測量とは

三角測量とは、字義通りには、三角法を用いた測定法のことであり、既知の二点間の距離と二つの角の大きさから三点目の位置を特定するものである。デイヴィドソンは、われわれの信念や発話がそもそも内容をもつために成立していなければならない状況をこの三角測量になぞらえて表現する。その状況とは、二人の人物が共通の原因に対して同時的かつ相互的に反応するような状況である¹²。デイヴィドソンによれば、信念や発話の内容は三角測量によってはじめて特定される¹³。そして、そのことが大規模な懐疑論の可能性を排除すると論じるのである¹⁴。

ここで、三角測量によってデイヴィドソンが説明しようとする「発話や信念の内容」について、重要な点を指摘しておこう。デイヴィドソンによれば、信念（や発話）の内容は一般に、信念をもつ人（や発話する人）がそれを信じることと独立にその真偽が決まるという意味で客観的でなければならない¹⁵。こうした意味で内容が客観的であることは、たとえばわれわれの信念の内容が偽でありうるという、信念に関するごく基本的な理解にとって本質的である。なぜなら、もし信念内容が客観的でなく、われわれがそれを信じるのが、それが真である根拠のすべてであるならば、われわれが信じていることが実は誤っていることなどありえないからである。したがって、われわれの信念は偽でありうるという常識的な考えを維持しようとするかぎり、われわれは内容の客観性を認める必要がある。そして、デイヴィドソンは信念や発話がこうした意味で客観的

内容をもつことは、三角測量のメタファーによって表されるような状況によって説明できると考えるのである。

さて、この点を念頭におきながら、三角測量を構成する要素について説明しよう。三角測量を構成する一つ目の重要な要素は、一定の言語的な反応(発話や信念)を引き起こす原因となるような対象・出来事である。デイヴィドソンによれば、信念や発話の内容は、それを引き起こす原因によって(まさにその原因を内容とするものとして)特定される。このように発話や信念の内容の決定要因を外的な原因に求める点で、デイヴィドソンの三角測量による内容の説明は、一般に「意味論的外在主義」と呼ばれる立場に分類されることになる。

さて、信念や発話の内容が客観的であるためには、単に原因が与えられているだけでは十分ではない。デイヴィドソンによれば、発話や信念が客観的な内容をもつためには、言語的反応を行う人物とその反応を引き起こす原因の他に、それぞれと相互作用する第二の人物が必要である。この二人目の人物は、われわれの言語的反応(発話や信念)が客観的な内容をもつために不可欠の役割を果たす。この役割は、より具体的には、言語的反応とそれを典型的に引き起こす原因との対応付けを確立するという役割と、われわれの言語的反応が実は誤りであるという事態を可能にするという役割である。

デイヴィドソンは、人のある言語的反応の内容が確定するためには、その人が様々な反応のタイプと、その内容となる原因のタイプとの間の対応付けを確立する必要があると考えた。たとえば、「牛」という発話が牛についての内容をもつためには、「牛」という発話タイプを、その種の発話を典型的に引き起こす生物(牛)のタイプと結びつけなければならない。しかし、デイヴィドソンによれば、単独の人物は自分の言語的反応と原因の結びつきを確立することができない。その理由は次のものである。一般に、われわれの発話を引き起こす原因は無数にある。たとえば、ある人物が「牛」と発話する際、それを引き起こす原因の候補には、その発話を引き起こすに至る(ピックバンから網膜の刺激に至る)因果的系列のあらゆる部分や、あるいは視野に含まれるあらゆる(牛の色、形等々)諸側面が含まれる。デイヴィドソンによれば、単独の人物は、こうした原因のどれが自身の発話の内容に関わる原因であるかを特定する手段をもっていない¹⁶。

さらにもう一つの問題は、単独の人物を考えるかぎり、言語的反応の内容が誤りである規準が確立されえないという点である。たとえば、牛を目の前にすると「牛」と発話してきたある人物が、馬を目の前に「牛」と発話したとしよう。われわれはこうした場合に、この人物が誤りを犯したと考えたくなるかもしれない。しかし、こうした印象は正しくない。単独の人物の「牛」という発話が馬によって引き起こされているかぎり、その発話が当の馬についても真であるような内容をもつ可能性が常に排除できないからである。

二人目の人物は、まさにこれらの問題を排除する役割を果たすために三角測量に導入される。三角測量においては、二人の人物は、互いの反応やそれを引き起こす原因を繰り返し観察することを通して、自分と相手の言語的反応とそれを典型的に引き起こす共通の原因を限定する。より具体的には、こうした状況において、互いの言語的反応の原因は、互いに観察可能な最も近接した共通原因(すなわち、二人が互いに注目している交点に位置するものとして)として特定され、その他の原因(体内の刺激や互いが共に観察できないような遠い原因)は内容の候補から排除される¹⁷。さらに、二人は、相手や自分が共有する原因のうち、どのような側面に同じような反応をするかを繰り返し観察することで、さらに共通の原因タイプを絞り込む。こうしたプロセスを通じて、二人の人は、特定の言語的反応のタイプと、それを引き起こす特定の原因のタイプとの安定的な結びつきを確立する(つまり、その言語的反応の内容を特定する)ことができる。

さらに第二の人物は、言語的反応の内容が実は誤りでありうること(その意味で、言語的反応が客観的内容をもつこと)を可能にする。たとえば、先に述べたプロセスを通じて、二人が互いの言語的反応を、特定のタイプの共通原因に結びつけたとしよう。するとこの二人は、一方のある言語的反応(たとえば、「COW」という発話)が、他方のある言語的反応(「牛」という発話)と共通の原因によって引き起こされている(つまり、互いの言語的反応が同じ内容をもつ)と考えることができるようになる。さて、この二人が共通の原因に対して同じように反応しているかぎりは、単独の人物の場合と同様に、二人の言語的反応が誤りであると言われる余地が生じえない。二人の反応が、まさにそれを引き起こしている原因についてのものであることが常に可能だからである。しかし、二人に食

い違いが生じた場合には事情は異なる。たとえば、同じ原因に対して一方が特定の言語的反応(「COW」という発話)をしたのに対し、もう一方がそれと食い違う反応をするという事態が生じたとしよう。このとき、少なくとも一方は、その原因について誤りを犯したということが可能になる。なぜなら、同じ内容をもつ言語的反応に関して食い違っているならば、双方がともに正しいということはありませんからである¹⁸。このような点で、二人の人物が互いの言語的反応を同じ世界の原因と結びつけること、および、特定の原因について食い違った言語的反応を行うことの二つは、言語的反応の内容が誤りであるということが意味を成すための条件となる¹⁹。以上が、三角測量の基本的な枠組みである。

2.2 三角測量からの反懷疑論的論証とストラウドの批判

さて、デイヴィッドソンは、われわれの信念が客観的内容をもつためには三角測量が必要であるということを認識するならば、われわれの信念が大部分偽であることはあり得ないと論じる。この点は、次のような論証として理解できる。三角測量のモデルによれば、われわれの信念の大部分を占める知覚的信念の内容は、二人の人物に特定の言語的反応を典型的に引き起こすような、外界の対象・出来事によって決定される。それはすなわち、こうした信念の内容が外界で生じている事柄に一致しているということである。すると、我々が信じていることは大部分真であることが導かれる。これを三角測量からの論証と呼ぼう。

しかし、ストラウドは、たとえ信念が客観的内容をもつために三角測量が必要であるというデイヴィッドソンの主張を認めたとしても、われわれの信念や発話が大規模に誤っている可能性は残ると主張する。ストラウドによれば、三角測量のプロセスにおいて信念の内容を決定する原因は、二人の人物が「互いの言語的反応の原因とみなしているもの」にすぎない。ここには、二人が「互いに原因とみなす」ものと「実際に原因であるもの」が異なる余地が生じうるのではないだろうか。

このストラウドの疑念は、具体的には以下のような状況を描くことによって表現される。三角測量の状況で、AとBが互いに相手を観察しながら、互いの言語的反応を引き起こしている原因を特定しようとしている。そして、AとBは、互いの言語的反応(たとえば、「うさぎ」という発話)を引き起こしている原

因をうさぎだとみなすに至る。さらに、AとBは、こうした互いの反応を繰り返し観察することを通して、互いの言語的反応(「うさぎ」という発話)と、それを引き起こしている両者がみなしている原因との間の結びつきを確立する。その結果、互いの発話の内容は、うさぎについてのものとして特定される。ところが、実際には、本当に互いの反応を引き起こしているのはうさぎではなく、うさぎによく似たロボットであった。したがって、両者の発話はうさぎについてのものであるにもかかわらず、実際に互いの反応を引き起こしているのはうさぎではないため、両者の発話は誤りである²⁰。

こうした懐疑論的想定のポイントは、AとBが原因と見なしているものと、AとBの反応を引き起こしている実際の原因が異なる場合が考えられるかぎり、三角測量の状況のもとでも、われわれの発話が実際には誤りであることが可能であるという点である。この点を、その他の知覚的信念に拡張するならば、三角測量の状況においてさえ、われわれの信念の大部分が偽であるという想定は十分にありうるとストラウドは論じる。こうしてストラウドは、ここでも同様に、われわれの信念が大部分真であることを示すことにデイヴィッドソンは失敗していると結論づける。

2.3 ストラウドに対する応答

三角測量のシナリオに対するストラウドの懐疑は、三角測量の状況において二人の人物が互いの言語的反応の原因と見なすものと、二人の言語的反応を実際に引き起こしている原因が異なる状況が可能であるように思われるということに本質的に基づいている。しかし、三角測量がそもそも、われわれの発話や信念がはじめて内容をもつようになることを説明するものであることを思い出すならば、ストラウドが想定するような状況は理解不可能である。

まず、三角測量の状況を確認しよう。三角測量において二人の人物は、互いの反応を観察しながら、互いの言語的反応と、それを引き起こしている原因との結びつきを確立しようとする。たとえば、二人の人物は、あるタイプの原因(たとえば、特定の種類の生物個体)が現れるたびに互いが「うさぎ」と発話するということを繰り返し観察する。そのことによって二人は、その原因のタイプと「うさぎ」という発話タイプとの間の結びつきを確立し、「うさぎ」という発話の内容

を特定するのである。

そして、ここで注意すべきなのは、二人の人物が言語的反応と原因の間の結びつきを確立することに先立って、二人が互いの反応を引き起こす共通原因を「うさぎとみなす」ことなど不可能だということである。なぜなら、ある人が何らかのものをうさぎとみなすことが可能になるためには、その人はうさぎについての信念を形成できるのでなければならず、そうした信念は、三角測量に先立って与えられているものではないからである。したがって、三角測量の場面において、二人の人物は、互いの言語的反応を引き起こしている原因を、実際の原因以外のものとみなすことなどできない。誤解を恐れず述べるならば、二人の人物にとって、二人の「うさぎ」という発話を引き起こす典型的な原因がうさぎロボットである限り、二人の発話の内容は、その発話の実際の原因であるうさぎロボットでしかありえない。(これが奇妙に聞こえるのは、われわれがすでに「うさぎ」という発話がうさぎロボットについてのものではないということを確認してしまっているからである。)したがって、われわれの信念や発話の内容が、それを引き起こす実際の原因以外のものによって特定されるというストラウドの懷疑論的想定は、われわれがはじめて信念内容を与えられる三角測量の場面を考えるかぎりには、可能なものであるとは考えられない²¹。

だがここで、次のような疑問が出てくるかもしれない。たしかに、三角測量においてははじめて信念内容が特定される場面を考えるならば、先にストラウドが想定するような懷疑的状況は不可能であるかもしれない。しかし、三角測量によって信念の内容が特定された後であれば、われわれの信念が大規模に誤っている可能性はあるのではないだろうか。たとえば、二人の人物が、繰り返しの相互観察を通じて、「うさぎ」という発話と特定のタイプの原因(特定のタイプの生物)とを安定的に結びつけたとしよう。しかし、こうした結びつきが確立した後に、そのタイプの生物がすべてロボットに置き換えられたとしよう。このときに、我々がこうしたロボットをうさぎだと信じるならば、我々の信念の内容は特定の生物についてのものである以上、われわれのうさぎについての信念はすべて誤りであることになるだろう。こうした想定を他の信念にも拡張するならば、やはりわれわれの信念が大部分偽であることは可能ではないだろうか。

しかし、この反論は、三角測量の重要な側面を見落としている。すなわち、

われわれの言語的反応が偽であると言えるためには、われわれの言語的反応の間に食い違いがなければならぬという点である。たとえば、デイヴィドソンによれば、ある人物の「うさぎ」という発話が誤りであるという余地が生まれるのは、別の人物が、同じ原因に対して食い違った言語的反応をした場合だけである。逆に、われわれが一致した反応を続けるかぎり、われわれの言語的反応が偽であるということは意味を成さない。先程と同様に誤解を恐れずに言えば、もしうさぎをロボットに取り替えたとしてもわれわれの間の言語的反応にまったく食い違いが生じないならば、われわれの「うさぎ」という発話は、まさにうさぎとうさぎロボットの両方についてのものであり、したがって真であるとみなすことが可能なのである。(先程と同様に、これが奇妙に思われるのは、われわれが「うさぎ」がうさぎロボットについてのものではないことを、すでに確立してしまっているからである。)したがって、ストラウドが想定するような、われわれの言語的反応がすべて一致しているにもかかわらず、それらが実は大規模に誤っているかもしれない懐疑論的状况は、ここでもやはり不可能なのである。

3. おわりに

以上により、三角測量からの論証については、ストラウドの批判が成り立たないことを主張した。したがって、デイヴィドソンが説明するような三角測量によって信念が特定されることを認めるならば、われわれの信念が大部分偽である可能性は排除される。もっとも、本稿の議論は、信念の内容特定のために三角測量が必要であるというデイヴィドソンの枠組みを前提とするものであった。この枠組みは、信念の内容の客観性を説明するものとして一定のもっともらしさをもつとは言え、その正当化のためにはより詳細な議論が必要である。この点は今後の課題としたい。

註

¹ 慶應義塾大学文学研究科修士課程在籍 mail: topichocola@yahoo.co.jp

2. Davidson (1983), p. 153 [邦訳 p. 243].
3. Davidson (1983), p. 153 [邦訳 p. 242].
4. 主に, Davidson (1977), Davidson (1982a), Davidson (1983), Davidson (1991), Davidson (1990), Davidson (1995), など.
5. たとえば, Davidson (1973), p. 137 [邦訳 p. 137-138].
6. Davidson (1982a), p. 137 [邦訳 p. 273].
7. Davidson (1977).
8. Davidson (1983).
9. Davidson (1977), p. 201 [邦訳 p. 217]. なお, 邦訳の一部に若干の変更を加えた.
10. この点を指摘する批判は, Foley & Fumerton (1985), Rasmussen (1987), Dalmiya (1990), Ludwig (1992) にも見られる.
11. 実際には, 私はデイヴィドソンの言語哲学の枠組みに, (#) を支持する要素を見出すことができるのではないかと考えている. しかし, その点は別の機会に論じることにはしたい.
12. Davidson (2001a), p. xv [邦訳 p. 8]. 「思考と言語のために必要な客観性は, 複数の生物が, 共通の遠位的刺激や, それに対しておたがいが示す反応に対して, 相互的かつ同時に反応するという事実に依存している. 二人の話し手と共通世界とのあいだのこの三方向の関係のことを私は「三角測量」と呼ぶ.」
13. Davidson (1991), pp. 212-213 [邦訳 pp. 327-328].
14. 三角測量の議論は, 知覚的信念や知覚的言明に関するものである. しかし, 知覚的信念は我々もつ様々な信念の基礎となる信念であるので, 知覚的信念の大部分について懐疑論が成立しないことを示すことは十分な意義をもつ. なお, とくに断りがない限り, 以下で用いられる「信念」は知覚的信念を指すこととする.
15. Davidson (2001), p. 1. 「われわれの信念は客観的である. もちろん, これは信念が偏見のないものであるとかすべての証拠のもとで形成されるということではなく, 信念は真または偽であり, いくつかの例外を除いては, その真理はわれわれとは独立の事柄に依存するという意味において客観的であるということである.」
16. Davidson (1997), pp. 129-130 [邦訳 pp. 208-209]. 「共通の環境に対する反応を共有する他者がいなければ, 世界における何にわれわれは反応しているのか, という問いへの答えは無い. その理由は原因という概念のあいまいさに関わるものである. 信念に内容を与えるのは, 最も単純な事例においてはその原因であるから, どうしてもそうしたあいまいさは解消されねばならない.」
17. Davidson (1991), pp. 212-213 [邦訳 p. 328]. 「二つの視点があって初めて, 思考の原因に場所が与えられ, ひいては, 思考の内容が定まる. それはある種の三角測量と見ることができる. つまり, 二人の人物の各々は, 一定方向から流れ込む感覚刺激に別様に反応している. 刺激が流れ込んでくるさいの通路を外部へと引き延ばすと, その交点が共通の原因である. 二人の人がおたがいの反応(言語の場合なら, 言語的反応)に気づくとするなら, 各人は, それらの観察された反応を, 自分が世界から得た刺激と結びつけることができる. こうして共通の原因が特定される. これによって思考と発言に内容を与える三角形が完成する. しかし三角測量のためには二人が必要である.」
18. もっともあまりに食い違いが多く, 実は二人は同じ原因に対して反応していなかったということになる場合もあるだろう. そしてその場合には, 内容は確定されないことになる. ただここでは, そもそも内容をもつことが成立するための条件を特定しようとしているため, 首尾よく内容が確定される場合についてのみを考察している.

- ¹⁹ Davidson (2001c), p. 7. 「この要素は、第二の生物——これは社会を象徴する——によって与えられる。私が記述したモデルは、たしかに、生物たちが異なる反応をするとき規範がどこにあるのか示しはしない。(中略)ポイントは、規範を同定することではなく、規範があるということに意味を与えることであり、これはわれわれ生物たちが同じように反応する大部分の事例と反応が分かれる逸脱した事例の間違いを指摘できるならば、達成されたのである。」
- ²⁰ Stroud (1999), pp. 153–154.
- ²¹ Verheggen (2011) も、ストラウドの想定する懐疑は三角測量のもとでは不可能であるという本稿と同趣旨の反論を与えている。しかし私は、ヴァーヘッゲンの議論は三角測量の外在主義的側面にのみ着目するものであり、デイヴィドソンの反懐疑論的議論において第二の生物が果たす役割を十分に評価できていないと考える。

* 参考文献 *

- Dalmiya, V. (1990), “Coherence, Truth and the ‘Omniscient Interpreter’”, *The Philosophical Quarterly*, vol. 40, pp. 86–94.
- Davidson, D. (1984), *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford: Clarendon Press. [邦訳 D. デイヴィドソン『真理と解釈』野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要訳, 勁草書房, 1991年]
- (1973), “Radical Interpretation”, *Dialectica*, vol. 27, pp. 313–328. Reprinted in Davidson (1984).
- (1977), “Method of Truth in Metaphysics”, *Midwest Studies in Philosophy*, vol. 2, pp. 244–254. Reprinted in Davidson (1984).
- (1982a), “Empirical Content”, *Grazer Philosophische Studien*, vol. 16/17, pp. 471–489. Reprinted in Davidson (2001a).
- (1982b), “Rational Animals”, *Dialectica*, vol. 36, pp. 317–327. Reprinted in Davidson (2001a).
- (1983), “A Coherence Theory of Truth and Knowledge”, in *Kant oder Hegel?*, D. Henrich (ed.), Stuttgart: Klett-Cotta. Reprinted in Davidson (2001a).
- (1990), “Epistemology Externalized”, *Dialectica*, vol. 45, pp. 191–202. Reprinted in Davidson (2001a).
- (1991), “Three Varieties of Knowledge”, *Royal Institute of Philosophy Supplement*, vol. 30, pp. 153–166. Reprinted in Davidson (2001a).

- (1995), “The Problem of Objectivity”, *Tijdschrift voor Filosofie*, pp. 203–220. Reprinted in Davidson (2001b).
- (1997), “The Emergence of Thought”, *Erkenntnis*, vol. 51, pp. 511–521. Reprinted in Davidson (2001a).
- (2001a), *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford: Clarendon Press. [邦訳 D. デイヴィドソン『主観的, 間主観的, 客観的』清塚邦彦・柏端達也・篠原成彦訳, 春秋社, 2007年]
- (2001b), *Problems of Rationality*, Oxford: Clarendon Press. [邦訳 D. デイヴィドソン『合理性の諸問題』金杉武司・塩野直之・鈴木貴之・信原幸弘訳, 春秋社, 2007年]
- (2001c), “Externalism” in *Interpreting Davidson*, P. Kotatko, G. Pagin & G. Segal (eds.), Stanford: CSLI.
- Foley, R. & R. Fumerton (1985), “Davidson’s Theism?”, *Philosophical Studies*, vol. 48, pp. 83–89.
- Gluer, K. (2006), “Triangulation”, in *The Oxford Handbook of Philosophy of Language*, E. Lepore & B. Smith (eds.), Oxford University Press, pp. 1006–1019.
- (2011), *Donald Davidson*, Oxford University Press.
- Ludwig, K. (1992), “Skepticism and Interpretation”, *Philosophy and Phenomenological Research*, vol. 52, pp. 317–339.
- Rasmussen, S. A. (1987), “The Intelligibility of Abortive Omniscience”, *The Philosophical Quarterly*, vol. 37, pp. 315–319.
- Stroud, B. (1999), “Radical Interpretation and Philosophical Skepticism”, in *The Philosophy of Donald Davidson*, L. E. Hahn (ed.), LaSalle, Ill: Open Court, pp. 139–161.
- Verheggen, C. (2007), “Triangulating with Davidson”, *The Philosophical Quarterly*, vol. 57, pp. 96–103.
- (2011), “Triangulation and Philosophical Skepticism”, in *Triangulation: From an Epistemological Point of View*, M. C. Amoretti & G. Preyer (eds.), Ontos Verlag, pp. 31–46.
- 飯田隆 (2002), 『言語哲学大全 IV』, 勁草書房。